

金閣寺境内出土の修羅

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



修羅の出土状況 右奥が修羅1、左手前が修羅2。

1989年、特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）境内の発掘調査で、修羅が出土した。藤井寺市に次いで2例目の発見である。

修羅とは、巨石などの重量物を運搬するための道具のことである。室町時代の文献にみえ、古くから修羅と呼ばれていたようである。

この名称は阿修羅王と帝釈天が戦い、強力ごうりきの修羅が帝釈（大石）を動かしたという仏典の故事から名づけられたらしい。現在でも、重量物運送業者のあいだでは、その呼び名が生きている。しかし、修羅の形状については、実態が明らかではなかった。

1978年に大阪府藤井寺市道明寺の仲津媛陵古墳の陪塚周濠から、古墳時代の修羅が大小2基出土した。大型修羅は長さ8.8m・幅1.8m、小型修羅は長さ2.9m・幅0.75mであり、Y字形を呈している。2基とも一木で、二股の部分を利用して造られている。大型修羅はアカガシ科の材で、上部を平らに削って大きな石を乗せやすくして、両側に紐をかけたたり、棒を入れたりするくり込みがある。小型修羅の材質はクヌギである。仲津媛陵古墳は古市古墳群中の一角を占め、周辺には応神陵古墳をはじめとする巨大古墳が点々と存在している。古墳築成時に巨石を運搬するため、修羅が用いられたのであろう。同時にコロ棒も出土し、コロを使って移動させたことがわかる。1979年にはこの出土修羅を元に復元し、牽引実験が実施され、巨石運搬技術の検討が行なわれた。

金閣寺の前身は、元仁元年（1224）西園寺公経が営んだ山荘北山第を、応永4年（1397）足利3代将軍義満が譲り受け造営した山荘北山殿である。北山第には多数の建築と景勝の園池があったことが知られている。そして義満の北山殿にも、金閣と呼ばれる舍利殿の他、いろいろな建築があった。しかし義満没後、4代将軍義持が舍利殿を除く諸建築を他所に移してしまった



『築城図屏風』(部分) 名古屋市博物館蔵

のである。舍利殿の近くにあったとされる天鏡閣が南禅寺方丈に、宸殿が南禅院に、公卿間が建仁寺方丈に、懺法堂が等持寺宗鏡堂にそれぞれ移築された。その頃、山荘北山殿は鹿苑寺と呼ばれ、義満ゆかりの故地に姿を変えたのである。さらに応仁の乱が起こった際、鹿苑寺も戦場となり、大きな被害を受けた。唯一残った金閣(舍利殿)も、昭和25年(1950)に焼亡し北山殿の建築はすべて失われてしまった。現在の金閣は、昭和30年(1955)に復元再建されたものである。

金閣寺では1988年10月から、防災設備工事にともなう発掘調査を実施していた。貯水槽とポンプ室予定地では、建物跡・溝跡・庭石などを検出した。そして1989年9月に防災設備の共同溝予定地で、修羅2基が池の跡から出土したのである。修羅は2基が縦に並んだ状態で発見され、多量の土器と木

製品をともなっていた。土器はほとんどが土師器の皿で、木製品は箸や折敷おしきの断片などである。その年代は室町時代中頃に比定できる。修羅は2基とも二股の木を利用している。修羅1は長さ3.5m・幅1.4m、修羅2は長さ4.7m・幅1.3mである。双方とも、頭部に大きめの方形の穴がひとつ、体部に方形の小さな穴が複数穿たれている。頭部の穴は修羅を引くための綱を掛けるためのもの、体部の穴は石材を修羅に紐でしばりつけるためのものと考えられる。体部の根元には、切断の痕跡が認められる。この修羅は上面も磨り減っているため、両面とも使用したことがわかる。樹種は修羅1がクリ、修羅2はケヤキである。

金閣寺庭園には、多数の庭石がいたるところに用いられているが、一部を除いて大半の石材はチャートである。金閣寺裏山一帯にはチャートの岩盤が露出している箇

所がみられ、周辺から石材を調達したと思われる。切りだした石材を修羅に乗せ、紐でしばりつけ、裏山の斜面を引いて庭園に配置したと考えられる。修羅の使用法として参考になるのは、慶長12年(1607)の徳川家康の駿府城築城の様子を描いたとされる名古屋市博物館所蔵の『築城図屏風』がある。修羅の下にコロを並べてひいているのがわかる。

金閣寺の修羅は2基がきちんと並べられて出土しており、使用後、乾燥をふせぐために池底に沈めて保存されていた可能性がある。藤井寺市の修羅も、古墳の周濠内から出土し、保存されていたものと考えられている。

一木で造った修羅の出土例はこの2遺跡であるが、ミニチュアの修羅形木製品や、組立式の木ぞりは数例出土している。藤井寺市の修羅が古墳時代、金閣寺の修羅が室町時代のもので、約千年もの間、形状が変わらないことは興味深い。

大阪府藤井寺市の仲津媛陵古墳陪塚出土の修羅はPEG(ポリエチレングリコール)含浸法と呼ばれる樹脂加工による保存処理中である。金閣寺出土の修羅は、現在ウレタン樹脂で梱包し、仮置きの状態である。出土した木製品はそのままでは朽ちてしまい原形を保つことは困難なため、保存処理加工が必要である。修羅は一般的な木製品の考古遺物と違って、大きなものであり、保存技術や展示施設など、様々な問題点があるが、近い将来修羅の永久保存処理を施し、一般に公開されることになろう。